西村直子（にしむらなおこ）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第145号
学位授与年月日	平成15年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 印度学仏教史学専攻
学位論文題目	**放牧と敷き草刈り** **——Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究——**
論文審査委員	（主査） 教授 後藤敏文　助教授 桜井宗信 教授 鈴木岩弓 教授 井狩彌介 教授 永ノ尾信悟

論文内容の要旨

0．本論文の目的

アーリヤ人の宗教文献群 Veda は、B.C. 1200頃に現在伝えられる形で伝承が固定されたと考えられる最古の Ṛgveda-Saṁhitā（**RV**）をはじめとして、4つの学派による伝承から成っている：RV、Sāma-Veda（**SV**）、Yajur-Veda（**YV**）、Atharva-Veda（**AV**）である。本稿では、YV の諸文献の中、各学派の Saṁhitā（**YS** : Maitrāyaṇī Saṁhitā : **MS**; Kāṭhaka-Saṁhitā : **KS**; Taittirīya-Saṁhitā : **TS**; Vājasaneyi-Saṁhitā : **VS**）、Taittirīya-Brāhmaṇa（**TB**）、Śatapatha-Brāhmaṇa（**ŚB**）を基本資料とし、冒頭の mantra（祭詞）集成（MS I 1,1－2^{m}; KS I 1－2^{m}; TS I 1,1－2^{m}; VS I 1）と、それに対する bāhmaṇa（br. : mantra に纏わる種々の言説：mantra の意義付け、mantra を伴って行われる行作の規定とその意義付け、神学議論等：MS IV 1,1－2^{p}; KS XXX 10－XXXI 1^{p}; TB III 2,1－2^{p}; ŚB I 7,1,1－8）の記述を対象とする。YV 諸文献を編集し、職業的に伝承していたのは、祭式の具体的な行作を担当する Adhvaryu 祭官である。これらの文献の成立年代は、本稿で扱う部分については、およそB.C. 1000－750頃と考えられる。

本稿で扱う mantra 集成は各 YS の冒頭に置かれている。その主題は、供物となる乳を得る為の準備儀礼である《放牧》（伝統的には vatsāpākaraṇa「仔牛を［母牛から］引き離す事」と呼ばれている）と、祭式において用いる敷き草、barhiṣ を刈る儀礼、《barhiṣ 刈り》（barhirāhāraṇa「barhiṣ

を［祭場へ］運ぶ事」）とである。

本論文では、

① 利用しうるすべての刊本を用いてテキストの確定に努めた。その際、これまでに何らかの形でテキストの校訂、修正に言及する二次文献は、知られる限り考慮に入れた。

② 精密な逐語訳並びに注解を行なった。特に、祭式に関わる諸事象の検討、内容・形式上の平行箇所の確認、文法・文献学的諸相に亘る精査・確認に努めた。語義・文法・スィンタクス等に関する個別の研究成果はその都度注記した。二次文献については可能な限り考慮した。

③ 上記の翻訳に基づき、祭式、伝承、並びに神学議論の歴史的展開とその基盤となる実生活上の諸事項を、テキストの記述に則して解明すべく努めた。

この作業を通じ、Veda 祭式の一端を明らかにすると共に、文献の成立史や祭式乃至神学議論の発展段階、基盤にある当時の生活や世界理解の解明、更にはインド思想史全体を貫く根本命題である輪廻と業の理論の成立前提等の解明に資する事を目指した。以下に、全体に関わる問題に絞って要約を記す。

1-1.「新満月祭」概要

Veda 祭式は、自分の祭火を設置した者が祭主として祭官に依頼する事によって挙行される。主要 3 祭火：Āhavanīya祭火（「［供物がその中に］注ぎ込まれるべき」祭火）、Gārhapatya祭火（「家長に属する」祭火）、Anvāhāryapacana 祭火（「祭官に報酬としてふるまわれる粥を調理する」祭火）を必要とする祭式を Śrauta 祭式、これらの祭火を Śrauta 祭火と総称する。Veda の祭官職は主に 4 つの職掌から成っている：供物を捧げるべき神々を讃えて祭場に招く讃歌を唱える Hotṛ 祭官、祭式の準備から献供、終了儀礼に到る迄、祭詞（*yájuṣ-*）の唱誦を伴って所作の実行を担当する Adhvaryu 祭官、Soma 祭において一定の旋律に基づいて讃歌を歌い上げる Udgātṛ 祭官、種々の呪法を司る Brahmaṇ 祭官（定式化した Śrauta 祭式では祭式全体の監督、行作・手順等に過失が生じた時の祭式の「治療」を担当）である。Hotṛ 祭官、Adhvaryu 祭官、Udgātṛ 祭官（及びその助手を含めたグループ）は、RV、YV、SV に伝承される mantra の唱誦を担当する。家長となって生涯 Śrauta 祭式を行おうとする者は、最初にこれらの祭火を設置する祭火設置祭を新月乃至満月の日に行い、次いで Agnihotra（毎朝・毎晩、祭火に熱した乳を 2 回ずつ献供する祭式）を行った後、新月祭または満月祭の何れかを開始する。

本稿で扱う YV 各学派の Saṁhitā において冒頭に集成されている mantra（*yájuṣ-*）は、一般に新満月祭において唱えるべきものと位置づけられている。新月祭・満月祭（*darśapūrṇamāsáu*）は Śrauta 祭式の一つであり、毎月新月の日と満月の日とを中心として、半月毎に行われる祭式である。原則として、前祭（Upavasatha）を行う 1 日目と、献供を行う本祭日との、2 日間に亘って行われる。後に成立した儀規文献（Śrautasūtra : **ŚrSū**）の段階では、パンケーキ、粥等の穀物製品を主要な供物とする種々の穀物祭の基本型として位置づけられている。また、祭主は生涯新満月祭を挙行すべきことも規定されている。

一般に、標準的な新満月祭の供物は 2 枚の **Puroḍāśa**（大麦または米から作られるパンケーキ）と説明される。そのうち 1 枚は新月祭、満月祭に共通する、Agni に対する 8 皿分の Puroḍāśa である。その他に満月祭では Agni と Soma とに対する11皿分の Puroḍāśa が、新月祭では Indra と

Agni とに対する12皿分の Puroḍāśa が献供される。また、新月祭では Indra－Agni への Puroḍāśa に代わって **Indra** への **Sāṃnāyya**（前祭日の夜に搾乳、加熱し、酸発酵させておいた酸乳と、本祭当日朝に搾乳、加熱しておいた乳とを、献供直前に混ぜ合わせた物）が献供されることもある。Upavasatha の日、祭主は誓戒（vrata）の遵守に入って髪と鬚とを剃り、許可された物をのみ食べ、性交を慎んで妻と共に祭場の土間に横たわり、夜を過ごす。また、祭官は本祭の準備を行う。本稿で扱う《放牧》と《barhiṣ 刈り》とは、同日夜に行われる《搾乳と dadhi（酸乳）製造》と併せ、Upavasatha の日に行われる準備作業として位置づけられる。これらの準備作業に関わる mantra（祭詞）は、YV 全学派の Saṁhitā の冒頭に置かれている。

1-2. 原典

1-2-1. Saṁhitā と Brāhmaṇa

YV 学派の文献は、祭式の中で Adhvaryu 祭官が唱えるべき *yájuṣ-*「祭詞」を中心とする mantra と、それを巡る br.（→ 0.）とを軸として構成されている。Adhvaryu 祭官は祭式の供物、用具、祭場等の準備から献供、終了儀礼に至る迄の実務に携わり、事実上の祭式執行者といえる。その一々の行作は多くが mantra の唱誦と共に為される。従って、祭式の式次第や行作の手順を再構成する上で、YV 学派の文献は欠くことのできない資料である。但し、br. の記述の中心はあくまでも mantra 解釈や行作の意義付けに置かれている為、そこから得られる情報のみに基づく再構成は困難であり、br. よりも後に成立したものではあるが、祭式に纏わる諸規定を細かく定めた ŚrSū（儀規文献）の記述を考慮せざるを得ない事が多い。

現存する Yajur-Veda の諸文献は、主に 4 つの学派に帰せられる：Maitrāyaṇīya（**M**）、Kaṭha（**K**）（並びにこれに準ずる Kapiṣṭhala-Kaṭha : Kap）、Taittirīya（**T**）、Vājasaneyin（**V**）である。何れも自派の名を冠する Saṁhitā を伝承しているが、それらには極めて似通っている部分と他派に対応が認められない部分とが混在している。また、T 派並びに V 派には、独立した Brāhmaṇa 文献が伝承されている。

Kap 派とその文献 Kapiṣṭhalakaṭha-Saṁhitā（**KapS**）については、K派に準ずるものと考え、ここでは特に区別しない。また、V 派には更に Mādhyandina 派と Kāṇva 派との 2 派が現存し、各々 VS と ŚB とを伝承しているが、ここでは一括して扱うこととする。

Saṁhitā「本集」は、すべての学派がそれぞれ伝承する、学派の根幹を為す聖典である。また、Brāhmaṇa はこれに付随する文献として位置づけられる。一般には Saṁhitā : mantra 集成；Brāhmaṇa : mantra の意義付け等（brāhmaṇa）と説明される。YV 学派以外の三 Veda 学派（RV 学派、SV 学派、AV 学派）と YV の V 派については、この説明が当てはまる（VS : mantra 集成、ŚB : br.）。これに対して M、K（~ Kap）、T の 3 派は mantra 集成と br. とを Saṁhitā に一括して編集しており、その方針を異にしている（MS、KS [~KapS]、TS）。このような編集方針の違いから、一般に前者を白 YV 学派、後者を黒 YV 学派と区別して呼んでいる。黒 YV 学派の諸文献は、白 YV 学派よりも古い年代に成立したとされている。何れの場合にも、原則としては mantra 集成の成立が br. の成立に先立つと考えられる。黒 YV 学派の br. 部分は、Veda 文献群における最古の散文として位置づけられる。TB 及び ŚB の成立は他の Veda 学派の Brāhmaṇa 文献群とほぼ同年代と考えられている。しかしながら、Veda 文献群全体を通じて、アクセント付きの br. を伝承しているのは YV 学派だけであり、mantra の意義を述べるという営みは、四 Veda 学派の中で YV 学派において初めて為されたものと考えられる。

黒 YV 学派の中で古層に位置する MS と KS との間の新古の差は、決定し得ない。これらより新しい TS を伝承している T 派では、TB という文献をも編集しており、°-Brāhmaṇa という名称を持つ独立した文献の存在が確認されない M、K の両派に比して新しい段階に進んでいたものと推測される。T 派の文献は黒 YV 学派の中では新層に位置し、全体としては白 YV 学派の伝承より古い要素を保存していると考えられるものの、神学議論や思想の点では極めて近しい状況にあったものと推測される。特に TB と ŚB との新古については今後更なる検討が為されるべきである。

1-2-2. Śrautasūtra（儀規文献）

YV 四学派の中、K 派以外の三学派は ŚrSū（儀規文献）を伝承している。後の更なる分派状況に従って、伝承されている ŚrSu の数も異なる。

br. が mantra 解釈と行作の意義付けを中心とするのに対し、ŚrSū は祭式行作を主とする細かな規定を記述したものであり、また、祭式毎に、おおよそは行作が為される順番通りに編集されている。従って、祭式行作の式次第や手順のより精密な再構成には、ŚrSū を参照せざるを得ない。但し、mantra の引用順序が各所属 Saṁhitā における mantra 集成乃至 br. の記載順序と部分的に異なる事、成立年代が遅い事等の理由から、br. に基づく祭式の再構成を試みる際に、ŚrSū の記述を全面的に採用することはできない。br. と ŚrSū との間に見られる差異こそが、祭式の発展段階を明らかにしてゆく上での重要な手がかりとなる。

1-3. 研究史

新満月祭の研究は、Hillebrandt が Das altindische Neu- und Vollmondsopfer（Jena 1897）において ŚrSū に基づく式次第の再構成を行って以来、長く為されることがなかった。但し、Hillebrandt は、諸 ŚrSū 間の成立年代と伝承内容との相違から推測される新満月祭の発展史に対して殆ど言及していない。ŚrSū 段階は勿論、br. の段階に遡って各文献の記述を比較検討することにより、各学派が置かれていた状況、文献成立の背景にある生活環境と祭官職が担っていた役割の変化等の諸要素から、新満月祭のみならず Veda 祭式全体が様々な段階を経て変遷の道を辿っていった事が明らかとなる。Hillebrandt の成果の上に立ち、新満月祭の更なる解明が期待されている。特に、Saṁhitā、Brāhmaṇa といった古い文献に遡って研究する事が必要であり、同時に、br. 自体を言語、祭式、文献成立史などの視点から精査する事も不可欠である。

Hillebrandt の時代から今日に至るまで、多くの文献が校訂出版、翻訳され、言語乃至祭式の面から質・量とも高い水準の研究が為されてきた。特に Āpastamba-ŚrSū の翻訳（Das Śrautasūtra des Āpastamba. Göttingen－Leipzig 1921, Amsterdam 1924, 1928）を始めとする Caland による研究には負う所が多い。また、Kashikar が中心となって刊行中の Śrautakośa は、ŚrSū の中で最も古い年代に成立したとされる Baudhāyana-ŚrSū を軸として各祭式を概観し、その準備から終了に到るまでの一連の行作を式次第に沿って項目に分け、各文献の対応する記述を集成したものである。Veda 文献を網羅的に扱っており、Veda文献並びに祭式の研究に便宜を与える事は疑う余地が無い。しかし、祭式の式次第の項目立て、各文献の対応等、更なる精密な検討を要する部分も見られる。更に、各祭式の個別的な研究も多々為されてきた。これら、Caland を始めとする先学の諸成果により、ŚrSū という文献とそこに記述される祭式とが概観し得るものとなった。ŚrSū に基づく研究によってもたらされた成果が、Veda 祭式の根底にある br. に基づく祭式研究を可能にする基盤を整えつつあるものの、実際には、依然として ŚrSū が研究の中心に据えられてい

たままであった。その中にあって、KRICK による祭火設置祭の研究、Das Ritual der Feuergrüdung (Agnyādheya), Wien 1982, は、YV の br. 及び ŚrSū を軸として Veda の祭式文献を網羅的に扱い、詳細に論じて、祭式研究の目指すべき1つの方向を示している。

Veda 祭式は、その原初形態から ŚrSū に見られるような詳細な手順、式次第に関する規定を完備していたわけではない。複数学派の伝承を比較した時、何らかの改変の跡を見出すことができる。ŚrSū が自派の mantra 集成及び br. を規範としている事は明らかであるが、この mantra、br. といった Veda 祭式の根幹を為す部分は殆ど解明されておらず、多くの問題が残されている。

2-1. 祭式行為としての《放牧》

《放牧》の章に集成される mantra は、各学派の間に異同が少なく、順序もほぼ揃っている。br. の記述には具体的な行作への言及が殆ど見られず、mantra の意義付けが多くを占めている。後の ŚrSū においても行作の規定は枝の切断、仔牛／牝牛に枝で触れる事、枝を隠す事、の3点に留まる。祭式行為として放牧（に送り出すこと）を行う際に定められている行作が少ないという事は、そもそも日常的な放牧が、仔牛と牝牛とを引き離す以外には細かい手順を必要としなかった事を示唆している。本稿で扱う箇所に言及される放牧は、祭式文献の文脈に従い、供物の為の乳の獲得を目的とする1つの祭式行作として扱われる。この事は逆に、放牧そのものは日常的に行われていたことを裏付けてもいる。

供物の準備儀礼にあたる《放牧》は、牝牛を牧草地へ向かわせる際に仔牛を引き離す為の、枝の切断から始まる。その際の mantra＜*iṣé tvā ...*＞「滋養の為に君を」には、枝が切断される樹木への慰撫と自己の行為の正当化が意図されていると考えられる。次に mantra を唱えながらその枝で牝牛や仔牛に触れて両者を引き離し、牧草地へ向かう牝牛達に mantra を唱え掛け、最後の＜*yájamānasya paśūn pāhi*＞「祭主の家畜達を守れ」という mantra と共に枝を祭場の或る場所に置いておく行為をもって終えられる。牝牛達への mantra には、放牧先で実りある時間を過ごす事、恙なく放牧を終えて晩に再び戻ってくる事等を祈願する言葉と共に、この放牧が日常的な放牧とは異なる、祭式の供物の為の放牧である事が明記されている。

黒 YV 学派の中で古層に位置する MS 及び KS においては、荒野 *áraṇya-* が牛達の向かう牧草地として位置づけられていた事が窺われる。荒野は村落 *grā́ma-* と対を為す、既得権の及ばない領域であったと考えられる。そのような場所では自らの家畜を襲う種々の危険（他部族による略奪、怪我等）が予測される。《放牧》の mantra 集成には各学派を通じて、それらの危険を回避する為の、厄除けの呪文のような意味を持つと推測されるものも含まれている。その一方で、新層に位置する TS 及び ŚB には荒野等のように具体的な放牧先への言及が無く、更に、ŚB では牛達が晩に戻ってくる事にも触れられていない。概して、放牧の実像を窺わせる記述よりも祭式解釈や神学議論に重点が置かれている。これらを総合すると、祭式行為としての「放牧」は、次第に形式化されていったものと推測される。その背景には生活形態乃至生活環境の変化等が想定される。日常生活においては、放牧地が常に *áraṇya-* と位置づけられていたかどうか疑わしく、遊牧時代の習慣を祭式の時にだけ特別に模倣し、再現していた可能性がある。この事は、祭式文献の記述と当時の生活との関係を考察する上で常に留意すべき点である。また、それと平行して、時代の推移に伴う神学議論の深化、新満月祭（並びに Veda 祭式全体）の整備とも関連している可能性がある。

2-2.《barhiṣ（敷き草）刈り》

敷き草 barhiṣ は、すべての祭式において用いられる。使用目的の中心を為すのは、祭場に招いた神々の坐所の設定である。その原型は、客人接待の作法に求められる。《barhiṣ 刈り》の伝承は黒 YV 学派の文献にのみ見られ、白 YV 派の文献にはこれに相当するものが見られない。その背後には生活形態乃至生活環境の変化などの諸事情の関与が想定される。黒 YV 学派の記述では、barhiṣ を刈り取る行為は新月祭／満月祭の何れの場合にも行われる。

《barhiṣ 刈り》の章に集成される mantra の数は《放牧》よりも多く、mantra の唱誦と共に為される行作が細かく想定されていた事を示唆している。また、《放牧》の mantra 集成には学派間の相違が殆ど見られないのに対し、《barhiṣ 刈り》では伝承されている mantra そのものとその順序とについて、各学派の間に明らかな差異が認められる。

《barhiṣ 刈り》の次第は以下のように纏められる：Adhvaryu 祭官は草刈り鎌として用いる馬の肋骨を Gārhapatya 祭火で熱し、それを携えて刈り場へと赴く。鎌に限らず祭式道具を祭火で熱することは、その道具の聖化を意図するものと思われる。次に、刈り場で草（Darbha 草）の束を掴み、刈る。その際、掴んだ草をすべて刈って余らせない事が何れの br. にも明記されている。草を余らせる事は「祭式を余らせる事」と同置され、特に MS 及び KS ではその事によって祭主の競争相手が繁栄すると述べられている。祭式に用いられる物の残余には呪術的な力が宿るものと考えられていた事が窺われる。その背景には、部族間の競争を強く意識せざるを得なかった社会環境が推定される。これとは対照的に、TB に祭式の残余と競争相手の繁栄とを関連づける記述が見られない事は、MS 乃至 KS の年代・環境と TB の年代・環境との間で、生活形態（移住／定住等）が異なっていた可能性を示唆する。

草を刈る際には、草の節に鎌（馬の肋骨）の刃を当てなくてはならない。その背後には、barhiṣ 刈りと動物の解体との同置（草の節：動物の関節）の観念が見られる。また、何れの br. も不適切な刈り方と祭主の ātman の減少とを関連づけて述べている。この場合には、本祭の終了儀礼において barhiṣ の一部（prastara）を祭火に投じる事と祭主が天界に行く事との同置が予め念頭に置かれ、祭主の死後の在り方（来世の ātman：輪廻の主体）が問題となっていると判断される。

これらの諸点に留意しながら草を刈った後、その束を縛る。その際に用いる紐と草束の数については、ŚrSū に言及されている。br. では TB のみに束の数、紐の結び目への言及が見られ、繁殖（子孫繁栄）と関連づけられている。ŚrSū では barhiṣ が用途によって prastara、nidhana 等の名称で区別されており、祭式の整備が進み、複雑化していた事を窺わせる。TB における束の数への言及は、祭式の整備に関する TB の段階と ŚrSū の段階とが近接していた事を示唆している。

幾つかの束を作った後、mantra の唱誦と共にその束を頭に載せて祭場へと運ぶ。MS 及び KS には刈ってきた草がこぼれ落ちることを、一種の過失と位置づける記述が見られる。特に MS ではその過失が、祭主を傷つける事として具体的に述べられている。その過失を帳消しにする為の mantra には *devaṃgamám*「神々のもとへ行く［barhiṣ］」の語が見られる。TB ではこの mantra について「神々の下に行かせる」とだけ説明しており、草をこぼす事への言及は見られない。何れにせよ、この mantra によって、終了儀礼における barhiṣ 自体の祭火への献供が示唆されている可能性がある。

br. において、barhiṣ はしばしば祭主又は生き物達の身体に見立てられる。その背景には植物

の持つ繁殖力を取り込もうとする呪術的な意図が推測され、子孫繁栄を願う要素も見られる。特に、祭主と同一視する文脈では、祭主（の身体）を傷つけない事、死後の天界における五体満足の身体の獲得等が祈願されており、祭式の具体的な事物と死後の人間存在（輪廻主体）とが関連づけられている。祭式の文脈の中で為される、barhiṣ に関する具体的な行作の意義付けの検討により、祭主の死後の在り方を巡る議論が展開してゆく過程の一端を明らかにしうるものと思われる。

更に、《barhiṣ 刈り》の記述には、当時の世界構造の理解を解明する手がかりとなる点も見られる。mantra 乃至 ŚrSū の表現から、barhiṣ の刈り場は放牧地と同様、荒野 *áraṇya-* と位置づけられていた可能性がある。更に、その背景には祭場内の移動を移住に見立てる観念が関与している可能性がある。その際の mantra に *antárikṣa-*「中空」の語が用いられている点は注目に値し、今後、祭場の構造を天・空・地の三界に見立てる観念を整理することにより、br. における世界構造の理解がより明らかになるものと思われる。

2-3.《放牧》と《barhiṣ 刈り》の「新満月祭」における位置

《放牧》及び《barhiṣ 刈り》（黒 YV のみ→2-2.）は、《搾乳と dadhi 製造》とあわせて新満月祭の本祭前日に行う準備作業に当たるものである。《放牧》と《barhiṣ 刈り》との検討から、新満月祭の変遷と YV 文献の成立過程との跡をたどる為の一指標が得られる：後代の ŚrSū では満月祭では Agni に対する Puroḍāśa と Agni－Soma に対する Puroḍāśa とが、新月祭では Agni に対する Puroḍāśa と、Indra－Agni に対する Puroḍāśa もしくは Indra に対する Sāṃnāyya が、それぞれ供物として定式化されている。しかしながら、YV 学派のすべての br. においてそのことが明記されている訳ではなく、ŚrSū と同じ供物と対象となる神格との組み合わせは ŚB にはじめて完全に出揃う。このような br. と ŚrSū との間に見られる相違は、供物とその対象となる神格とを軸として、新満月祭の変遷の跡をたどることができる可能性を示唆している。元来、新月祭には Sāṃnāyya のみが、満月祭には Puroḍāśa のみが、それぞれ供物とされていた事が示唆される。

各 YS^m にのみ基づく場合、新満月祭を行う際に一番最初に行われる作業は《放牧》であると考えられる。MS^p 並びに TB^p は、《放牧》の mantra 集成に対する br. を新満月祭の br. の中の先頭に置き（MS IV 1,1 ; TB III 2,1）、この推測を裏付けているかのようである。KS でも新満月祭の br. の中では《放牧》が先頭に置かれているが、実はこの br. は XXX巻の末尾（XXX 10）に置かれており、《barhiṣ 刈り》以降の br. はすべて XXXI 巻に収められ、《放牧》だけが切り離されている。更に、ŚB では《放牧》に関する br. を《搾乳と dadhi 製造》の br. と併せ、主要献供について述べる部分（I 7,2）の直前（I 7,1）に、即ち新満月祭の記述全体（I 1－9）の中で後半部分に置いている。ŚB 冒頭に記される新満月祭前日の行作の内容は、祭主が vrata に服する事の説明のみであり、最初に引用される VS の mantra はこの時に唱える VS I 5 である。《放牧》～《搾乳と dadhi 製造》に関するVS I 1－4は、ŚB I 7,1 に初めて言及される。つまり、《放牧》の mantra 集成はすべての YS が一貫してこれを冒頭に置いているのとは対照的に、br. の段階ではその位置について学派間に相違が見られる。YV 四学派においては、《放牧》の位置付けに関して、① mantra 部分と br. 部分との間に全く差異が認められない M 派と T 派；② mantra、br. 共に《放牧》を冒頭に置きつつも《放牧》の br.（XXX 10）と《barhiṣ 刈り》の br.（XXXI 1）との間にテキスト構成上の大きな区切りを於いている K 派；③ mantra 部分と br. 部分との間で《放牧》（並びに《搾乳と dadhi 製造》）の位置付けが大きく異なっている V 派、の 3 つの立場

のあったことが窺われる。

新満月祭に関する黒 YV 学派の br. には、新月祭と満月祭とを区別する記述が見られない。一方、黒 YV 学派の文献では「祭主」の章に「vrata（誓戒→1-1.）に入る時、満月時は barhiṣを持ち、新月時は仔牛を伴う」と記されている。即ち、満月祭の場合には barhiṣ 刈りが行われる時を、新月祭の場合には仔牛の隔離（放牧）が行われる時を以て、vrata が開始されるものと解釈されているのである。更にこの場合、満月祭では barhiṣ 刈りを最初の行作と定め、章立ての上ではこれに先立つ、祭式行為としての《放牧》が行われていなかったことを意図している可能性がある。《放牧》が祭式行為として行われる背景には、牝牛の乳を供物とすることが想定されているものと考えられる。満月祭が《放牧》を祭式の範疇に位置づけていないとしたら、このことは逆に、満月祭の供物には乳を用いていなかったことを示唆する。必然的に、《放牧》を行わない満月祭においては、《搾乳と dadhi 製造》をも省くものと考えられていた可能性がある。ŚB 以降、《放牧》と《搾乳と dadhi 製造》とは、Sāṃnāyya を献供する新月祭に限定されるものと位置づけられている。これに対し、最古層に位置する MS 及び KS ではこれに関する態度を明確に示しておらず、これらより新しい T 派は TS^{p} において Sāṃnāyya の献供資格に言及するものの、無資格者の供物については述べられていない。古い段階の文献に Sāṃnāyya 献供を伴わない新月祭への言及が見られないことは、「新月祭の供物は Sāṃnāyya、満月祭の供物は Puroḍāśa」とする、新満月祭の原初型の存在を示唆している。

上記は《放牧》《barhiṣ 刈り》という限られた部分に基づく仮説である。今後、《搾乳と dadhi 製造》以下の部分と、更に、祭主などについて纏められた部分をも精査することによって総合的に検証してゆく必要がある。

論文審査結果の要旨

本論文は、インド最古の文献群「ヴェーダ」に関する文献学的研究である。組織された祭式を主題とする詩句・祝詞（マントラ）と議論（ブラーフマナ）の編集は「ヤジュルヴェーダ・サンヒター（本集）」（およそ紀元前1000～700年頃成立）に始まるが、現存ヤジュルヴェーダ全5学派の本集冒頭に集められた祭式用詩句と、これに対する神学的議論の部分、及び、本集に引き続いて成立した『タイッティリーヤ』、『シャタパタ』両ブラーフマナの該当部分を主たる研究対象としている。更に200～300年遅れて著された祭式の綱要書から、古い文献の理解に必要な各派の代表的テキストを選んで考察に加えている。内容的には「新月祭・満月祭」の本祭前日の準備に関する部分とされる。

略号表、凡例、文献一覧に続き、「総論」（pp. 25－54）が述べられる。「総論」は3章からなり、先ず、「新月祭・満月祭」、原典、研究史、研究方法について、理解の前提となる事項を纏めている。原典研究に深く分け入り、二次文献を使いこなした研究者のみが示しうる新知見が盛り込まれ、研究史を総括し、目下の課題の確認と示唆に富む緊張感のある記述となっている。

「総論」第2章は、祭式の内容と文献とが含意する問題について本論文の成果を集約し、「新月祭・満月祭」全体との関連を吟味している。筆者は原典の当該部分を「供物となる乳を得る為の準備儀礼としての放牧」と「敷き草刈り」とに関する祝詞の集成とその解釈と結論づけているが、「祭式行為としての放牧」という解釈は本論文が初めて提出した概念である。厳密な

原典研究と、関連する語・表現を最古の讃歌集『リグヴェーダ』に遡って歴史的に検証し、また、当時の生活形態とその変遷とに最大の配慮を払って得られた、説得力のある重要な成果である。

「総論」第3章では、得られた諸成果を、「新月祭・満月祭」全体、ブラーフマナ文献の記述方法・目的の変遷、ヤジュルヴェーダ諸学派の展開と文献成立史、という3つの巨視的観点から検証している。これ程徹底した検証から得た結論に基づいてヴェーダ祭式・文献を論ずる試みは、長い研究史の中でも実質的には為されていないと言ってよかろう。それだけに、極く限られた範囲から提出できる仮説と問題提起という制約にもかかわらず、今後のヴェーダ研究において常に指標とされるべき諸点を呈示し得ていると思われる。ヤジュルヴェーダ諸学派の展開と文献成立史に関する見解は、今後の研究の中でより精密化されてゆくであろうが、基本的に正しい第一歩と評価されることになろう。当面の課題の一つは、筆者自身が述べているように、準備日の残る主題「搾乳と酸乳の製造」を検討し、更に本祭日と祭主の役割の章を研究してゆく中で、今回可能性として提起された「元来、新月祭にはサーンナーイヤ（酸乳と加熱乳とを合わせた供物）のみが、満月祭にはプローダーシャ（パンケーキ）のみが、それぞれ供物とされていたことが示唆される」とする見解が支持されるか否かにあろう。検証すべき諸点の選び方にも配慮が行き届き、記述方法も妥当である。読者は、他の文献を介在させずに、ひとまず本論考を読んで理解し、考えを進めることができるよう議論が詰められている。

本論部分は「テキスト」(pp. 55－82)、「翻訳」(pp. 83－128)、および「各論」(pp. 129－300)よりなる。

「テキスト」は量としては多くはないが、諸版の校合、原典批判、言語に関する注記、平行箇所の呈示等に亘る脚注を完備し、原典のもつ諸々のアスペクトを慎重に検証した上で作られた、現段階では完璧に近いものといえる。注がれた時間とエネルギーは相当なものと評価できる。マントラ部分は詩行に分けられ、散文部分には、既出・新出のマントラの引用部分であることを示す表示、標準校訂版の頁・行への指示、内容による章節分け等の設備が施されて理解に便宜が図られ、しかも原典の姿が損なわれないよう工夫されている。

「翻訳」は語彙、文法、事項等についての精査・熟慮を経たものであり、今日の学的水準から望みうる最高のものと言えよう。最も古く難解な『マイトラーヤニー』と『カタ』両サンヒターの当該部分については、現代語に訳された最初の試みである。『タイッティリーヤ・サンヒター』、『同ブラーフマナ』、『シャタパタ・ブラーフマナ』には英訳が存在するが、本論文のそれと比較する時、文字通り隔世の感がある。詳細な脚注は多層多面な情報を網羅している。二次文献への言及は過不足無く、語彙、事項は、必要に応じて他の用例を精査して確定されており、独立の学術論文に値する脚注も少なくない。後の「各論」部分との配分具合も巧みである。本論文の翻訳は、原文のもつスタイル、論理を正確に伝えるべく工夫されており、翻訳に基づいて祭式の分析・研究ができる次元に達している。古代インドの思想史的営為の中核を成す祭式の研究には、祝詞と祭式議論を集めた最古の資料に遡る精密な研究が欠かせないことを、当時研究を主導したカーラントが明言して以来4分の3世紀が経過した。それが実現されずにきた主原因は、古い文献に関する研究史の積み重ねが、必要とされる理解をもたらす水準にまで達していなかったことにあると言える。本論文においてはまさしくそれが達成されつつあることを、ここに提出された翻訳は雄弁に物語っている。言い換えれば、文法研究と祭式綱要書の研究を中心として、この間各分野で蓄積された諸成果が本論文の水準を可能にしたので

あり、本論文は研究史の正統を歩むものと評価できる。その意味でも、筆者が祝詞集の最初の部分を取り上げたことは当を得た決断であった。ヴェーダ文献の編集順序には、祭式の整備と文献成立の歴史が反映されている可能性があるだけに尚更である。

「各論」は、一つ一つの祝詞の吟味・理解と、その意義付けを中心とした「ブラーフマナ」の議論の検討とから成る。さらに、祭式綱要書の該当部分を検討し、必要に応じて本論の主題に直接属さない文献や箇所をも取り上げ、同じ精度の文献学的方法によって論じている。本論文の特色の一つは、各文献や箇所をそれぞれ独立した対象として理解に努め、その後で、それらを相互の関連の中に置いて検討を加えるという点にある。当然の原則でありながら、本論文と比較する時、これまでの研究には徹底性が欠けていたことが明らかとなる。論述は懇切丁寧であり、精密である。本論文の本領は「各論」にあり、上述の諸点は、この本論部分で達成された粘り強い営為の結晶である。

新たに達成された成果は、祭式に関わる事柄に留まらず、テキストの伝承、文法・語源・語法などの言語事実、生活・生産・社会制度などの実態・事物史の各項に亘り、本論文の至る場所で提出されている。代表的なものを例示する：

牛の遊牧・放牧と略奪の危険、遊牧中心の生活から定住への移行、厳しい他部族との競争関係、荒野と住空間、および、天－空－地という世界構造などに関しては複数の箇所で検討が為されているが、「荒野での放牧」(pp. 166ff.：祭式行為としての「放牧」とその変遷)、リグヴェーダに遡る「放牧先での無事を祈願するマントラ」の改作次第を検討して得られるテキスト成立史と実生活の変遷に関する所見（pp. 218f.、231f.）などは特に重要な成果である。搾乳のために仔牛を母牛と一緒にする刻限 *saṃgava-* の検討（p. 132n. 573）も重要である。『カタ』と『カピシュタラカタ』両サンヒターの章立ての相違に関する所見（pp. 235ff.）はこの種のものとしては初めてのものと思われる。

樹木に対する慰撫と傷つける行為の正当化（p. 154)、敷き草（*barhíṣ-*）刈りと動物解体との関係、切られる草への配慮（p. 264および n. 808）の論究は、後の「不殺生」の観念に連なる可能性がある。神々（ここではルドラ）のアスペクトとしての祭火と「拝火教」的性格への言及（pp. 137ff.）は、ヴェーダ宗教の根幹に関わる指摘である。祭主の身体と同置される敷き草を天界へ送り届ける観念の指摘（p. 298)、ソーマの地上への招来とパルナ樹の由来に関する神話の紹介と検討（pp. 140ff.）は発展性のある寄与である。

語彙、文法に関わるものとしては、*gópati-*「牛たちの主人」(p. 211f.)、これまで言語学的観点から議論されることが多かった *goṣád/ghoṣád* の「牛たちの中に座を占める」から出発する解釈（pp. 243f.)、ギリシャ語の *theós* と語源的に結びつく難解語 *dhiṣáṇā-* の検討（pp. 249f.。草刈鎌として用いられる馬の肋骨に呼びかけられる語で、脇腹からの誕生の神話にも関連する)、*pariṣūtá-*（pp. 256f.)、*pra-ā́-kar*（p. 88 n. 330)、*pári-varj* の構文（p. 92 n. 352）などは、特に高度な成果である。

要するに、本論文は、難解な原典の精密な理解に努め、文献学の各領域において達成された諸成果、諸方法を動員して検証し、確実な成果をもたらした労作と言える。同時に、どのような方法を用いれば何がどこまで解明され得るか、という方法論においても模範を示している。確実な成果と、可能性や問題点の列挙とを明確に区別して呈示する仕方の中にも、研究史の把握に立った自覚が示されている。本論文によって、ヴェーダ祭式および祭式文献研究は新しい

段階に入ったと言えるのではないかと思われる。今後、この論文に見られるような研究方法が一つの標準を示すと思われ、祭式文献研究者に課せられる課題は一段と高く重いものとなったことが実感される。同時に、本研究は、我が国のヴェーダ祭式研究が世界の学界の中で新たな地位に立ったことを印づける記念碑的な研究と見なされるに至る可能性がある。審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位授与に十分な資格を有するものであることを認める。